ノエルとマナトとキノコ

敦賀市立黒河学校

六年

中原慧花（なかはらさとか）
長谷川珠実（はせがわたまみ）
八木原瞳（やぎはらひとみ）
前田清伽（まえだきよか）
木村莉緒（きむらりお）
藤田万由加（ふじたまゆか）
中野杏奈（なかのあんな）

←

各務原市立中央小学校

六年　黒川茜（くろかわあかね）

水野杏夏（みずのきょうか）

少女と不思議なキノコ

今でない時、ここでない所―

ある森に、ノエルという少女が動物と住んでいました。

少女は、食材を探しに深い森の中へ入って行きました。奥深くまで進んで行くと、

「まあ、なんてすてきなキノコなの」

と、ノエルは思わず大声でさけんでそのキノコに触れました。すると、どこからか

「ぼくにさわるな……！」

と、聞こえてきました。あたりを見回しても、だれもいません。そして、もう

一度そのキノコを採ろうとして触れると、
「だーかーら、ぼくにさわるなって言ってるだろ!!」
ノエルはやっと、このキノコに何かあるんだなと気付きました。そして、
「じゃあどうしたらこのキノコを採れるの？」
と、ノエルが聞くと、キノコは、
「ぼくを採るには……俺と入れかわれ!!」
「……は??」
ノエルは飛び上がっておどろきました。
「そんなこと……。どうやってするの？」
ノエルが再び聞き返すと、
「方法はぼくが知っている……まあお前がキノコになれば良いという話だ」
と返ってきました。
「そんな事したらあなたを採る意味がないじゃない」

とノエルは文句を言いました。
「まあ……そうだな。じゃあ、ぼくをキノコにした魔女を倒してくれ」
と言われて、ノエルは迷いました。
「うーん……。その方がいいかもね」
ノエルは考えて、納得しました。
「じゃあ、一時間だけ人間に戻れる方法を試してみるか？」
「そんなことできるなら、早く言いなさいよ」
ノエルはあきれました。
「うん……まあ、そうなんだけど……」
と、キノコはごまかしてから、
「じゃあ、とりあえず、そのへんに落ちている一番きれいな葉っぱを拾って、それに呪文を書いてくれ」
と方法を言いました。

「葉っぱは見つかったけど……私今ペン持ってないわ」
「じゃあ、爪であとを残せ」
「分かった。呪文は？」
「呪文は……『コノキ・ムールシュマ』」
ノエルは、言われたとおりに爪で葉っぱに呪文を書きました。
「じゃあ、それをぼくの上に置いてくれ……」
ノエルが葉っぱをキノコの上に置くと……！
「あなた……だれ？」
「オレだよ、オレ！　さっきのキノコ！」
「えっ……さっきはあんなキノコだったのに……意外とまともだったのね」
「なっなんだとおー！　キノコ姿だってまともだい！」
と返ってきました。
「じゃあ、魔女の館に行くぞ」

「うん！　……そういえば、あなたの名前は？」
ノエルは歩きながら少年になったキノコに聞きました。
「……マナトだ。おまえは？」
「私、ノエルよ」
「ノエル？　おもしろい名前だな。まあいいか」
ノエルは少しカチンときましたが、こらえました。
ノエルは、気をまぎらわそうと、
「それより、魔女の館にはまだ着かないの？」
と聞きました。
するとマナトは、
「ここだ」
と言って、足を止めました。
「……！」

ノエルは、思わず吹き出してしまいました。
だってそれは、巨大化したキノコのような、超メルヘンな家だったのです。
「このまま入るのはまずい。とりあえず、窓から様子を見るぞ」
とマナトは慣れた様子で家の中をのぞきました。
すると中では、魔女がキノコをきざんでなべに入れ、料理をしているところでした。魔女は黒いマントをかぶって、ニタッと笑いながら真っ黒のなべをかき混ぜています。
「怖――」
ノエルもマナトも鳥肌が立ちました。
その時、ノエルが地面に落ちているメモ帳に気がつきました。
『☆キノコの呪文集☆』
「……？」
ノエルが表紙をめくると、たくさんの呪文がずらりと書いてありました。

「何これ。こんなにもあるの？」
ノエルは、人をキノコにさせる呪文を探しました。
「あったあ！　見て、マナト！」
『フォーエバー、キノコパワー』
そこでマナトも気がつき、
「これを魔女に使えば……封印できるな！」
作戦は決まりました。家のドアを開けて、いざ戦いです。
「おんやぁー？　私のキノココレクションの封印が……解けたぁ……？」★
「しまった、見つかる」
マナトはあわててノエルを本だなのすき間に押し込みました。魔女は気のせいだと思ったのか、再びなべをかき混ぜ始めました。
突然、ノエルが顔を真っ青にして本だなを指さしました。そこに『☆キノコの呪文集☆』がぎっしりと詰まっているのを見て、マナトは腰を抜か

しました。マナトは頭を働かせ、良い作戦を思いつきました。それをノエルに伝えようといったん外に出ることにしました。マナトはノエルの手を引っ張り、そっとドアを開けました。

「ノエル、大丈夫か？」

そして、マナトはノエルに自慢げに作戦を伝えました。

「あそこに呪文集があっただろう？　あれを奪い、他に封印された人たちを見つけて助けるんだ」

ノエルはもっと詳しく知りたくて聞きました。

「それで、どうするの？」

「助けた人たちと協力して、魔女をやっつけるんだ」

マナトの言葉に、ノエルは大きくうなずきました。

二人は、さっそく魔女の館に入り、呪文集が詰まった本だなの前にそっと近づき、できるだけ多くの呪文集をかかえてあわてて外に出ました。二

人が奪った呪文集は、全部で十冊でした。
一冊目を開いてみると、一ページ目に呪文の文句と人の名前が書いてありました。呪文は『コノキ・イラワ』で、名前は『イヴ』です。二人はイヴを探しに森へ入って行きました。いくつものキノコを触っても、なかなか見つかりませんでした。もう、あきらめようかと思った時に、やっとキノコから声が聞こえました。女の子のようです。その女の子が尋ねました。
「わたしはイヴ。わたしを助ける呪文が分かるの？」
二人は、今までの出来事を全て話し、一番きれいな葉っぱを拾って呪文を書いて解いてあげました。イヴは、かわいらしい女の子でした。
それから、次々と呪文を書いて解き、八人を助けました。マナトが人間でいられる時間は、残り三十五分。マナトとノエルと八人は、急いで魔女の館に行きました。十人がドアを開けようとしたとたん、勝手にドアが開き、あやしげな紫色のネコが出てきました。

「お前はだれだ」
「ワタシハ、ムウラ」
「あっ、もしかして……」
ノエルとマナトは顔を見合わせ、あわてて呪文集を開き、その名前を探しました。このネコが呪文と関係があると思ったからです。ムウラは今にも飛びかかってきそうで、二人はあせりました。でも、なかなか見つかりません。
最後の呪文集の最終ページをめくった時、そこにムウラの名前と写真を見つけました。でも、色は白。やはり、ムウラも呪文をかけられていたのです。ムウラの呪文は『コノキ・トイワホ』。そして、葉っぱにはアルコールをつけるとも書かれていました。ムウラの後ろのたなにアルコールがあります。それを取り、一番きれいな葉につけ、呪文をとなえると、ムウラは、写真のように真っ白になりました。

「アレ？　イママデワタシ、ナニシテタ？」
「あなたは今まで、魔女にあやつられていて、そして……」
ノエルが今までのことを全て話しました。
「タスケテクレテ、アリガトウ。ワタシモ、ナカマニイレテホシイ」
「もちろん」
マナトは力強く言いました。
「おのれ、お前たち。全員キノコにしてやる」
私たちに気付いた魔女が、突然襲ってきました。その時、マナトは魔女をキノコにする呪文を思い出しました。
「行くぞ、みんな。あの呪文をとなえるんだ！」
『フォーエバー、キノコパワー』
「ギャー！」
みんなは一瞬目を閉じました。

恐る恐る目を開けると、そこには巨大なキノコが一つありました。
みんなは大喜びしました。館の外のキノコも、全部人間に戻りました。
ノエルは魔女に、
「もう悪いことをしないのなら、元に戻してあげるけど、どうする？」
と聞きました。
「もうしません。だから、元に戻してください……」
マナトはそれを聞いて、魔女を呪文で解いてあげました。
「今度やったら、もう許さないからな」
「はい……」

「これで、みんなとお別れね。ありがとう。でも、みんなとは、これからも友達だよね」
とノエルが言うと、

「うん。そうだよね」
全員が笑顔でうなずきました。
「じゃあね。バイバイ」
みんなは、それぞれの道を歩いていきました。